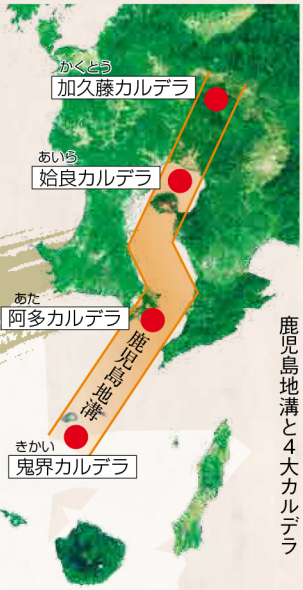
【郷土史への扉】

霧島錦江湾国立公園誕生記念
霧島と錦江湾



鹿児島地溝と4大カルデラ

平成二十四年三月、これまでの霧島屋久国立公園の屋久島地域が分割され、新たに姶良カルデラを加えて、「霧島錦江湾国立公園」が誕生しました。

霧島山や桜島、池田湖、開聞岳など火山活動によって形成された美しい景観と世界最北限であるマングローブ林やノカイドウ・ミヤマキリシマの自生地など豊かな植生、錦江湾に暮らす水生生物などが特徴です。

霧島や錦江湾はどのようにして、現在のような地形になったのでしょうか。

霧島地域の成り立ち

霧島地域の地形は、約二十の火山が連なった霧島山と、姶良カルデラ起源の噴出物であるシラス層の丘陵台地（カルデラ台地）、霧島山系から流れる河川によって形成された沖積平野からなっています。

霧島山の成り立ちは、約三十万年前に現在のえびの市を中心とした地域が大噴火を起こして「加久藤カルデラ」を形成したところから始まります。

その後、カルデラの南縁付近で火山活動が始まり、三十万年前から十五万年前にかけて栗野岳・烏帽子岳・矢岳などの古い時期の火山ができました。そして、約十万年前から活動が再開し、白鳥山・蝦野岳などがつくられ、さらに、大浪山、韓国岳・甑岳、新燃岳、高千穂峰、御池などができました。

霧島山の南麓には、まるで定規で直線を引いたように平らな台地が広がっています。これは約二万九千年前、錦江湾奥を噴出起源とする火山（姶良火山）の大噴火によってできました。この一連の火山活動は、南九州の地形を一変させました。噴火によって発生した火砕流（入戸火砕流）は南九州全域を襲い、それまでの地形をことごとく飲み込み、覆いつくして一面平坦なカルデラ台地をつくりました。その後、雨や河川など水の力によって、少しずつ谷が形成され、流された火山灰によって沖積平野がつくられました。

錦江湾の成り立ち

錦江湾は、鹿児島県の薩摩半島と大隅半島に挟まれた湾で、南北約八十キロ、東西約二十キロのやや蛇行した形状を成しており、その大きさは東京湾とほぼ同じですが、海から見える陸地の景観や海底地形はまるで違います。

東京湾の海岸部は低い丘陵地が広がり、海底も五十メートルよりも浅いのに対し、錦江湾は海岸線からすぐに急な崖を成している斜面が続き、海底の深いところは二百メートル以上の深さがあります。これは、錦江湾の形成に深い関わりがあります。

錦江湾の成り立ちは、約七十万年前から薩摩半島と大隅半島の間の断層が東西に開きながら陥没したと考えられ、その範囲は鬼界カルデラ付近から錦江湾、加久藤カルデラを経て人吉盆地付近まで延びており、この陥没した地形のことを「鹿児島地溝」と呼んでいます。鹿児島地溝には、北から加久藤カルデラ、姶良カルデラ、阿多カルデラ、鬼界カルデラの四つのカルデラが等間隔に並んでいます。中でも姶良カルデラの火山活動は未曽有の巨大噴火で、このときの噴煙は、標高約四万メートルに達し、吐き出された火山噴出物の量は約四百立方キロメートルと推定されています。この噴出物の規模は、雲仙普賢岳の約一万倍の量になります。このような大量の火山噴出物により火口部が陥没してすり鉢状のカルデラが形成され、海水が流入することによって、約二百メートルの水深を持つ錦江湾が形成されました。

火山活動と共に

時として災害をもたらす活火山。最近の桜島や新燃岳の火山噴火の様子を見ていると不安にもなります。しかし、火山活動は温泉や地球内部の資源をもたらしてくれることもあります。昨年三月、錦江湾奥部の海底から、約百八十年分のレアメタル鉱床を確認したとの報道は、錦江湾の豊かさを示すものとなりました。

霧島や桜島のように、活火山の間近に住んでいる地域はほかにありません。私たちは、霧島錦江湾国立公園内に住んでいることに誇りを持ち、自然豊かで、雄大で、美しく、そして時に危険な火山群と、うまく共生していきたいものです。

（文責＝鈴）